

生きる力を育み、未来を拓く道徳教育を目指して －総合単元的な道徳学習の実践－

和歌山市立貴志小学校
教諭 貴志 雅代

I 主題設定の理由

今日の子どもたちは、国際化や情報化が進む中で、それらに対してうまく適応しながら成長している。しかしながら、心の成長については、決して充分とはいえず、自分や友だちを大切にできなかったために起こった事件も多い。

このような事件の背景には、価値観の多様化により規範となる尺度が見えにくくなったことで、自分の行為に対して善悪の判断がつきにくくなっている状況がある。

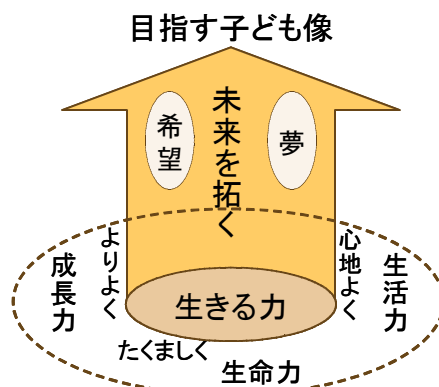
これを改善するためには、規範意識をしっかりともち、自分の力で生きていける子どもを育てる必要がある。道徳教育では、人間として生きていくために必要な基本的な価値観を学ばせるとともに、それに対する共通意識を育んでいかなければならない。

そのためには、将来に向かって夢や希望をもって生きていく子どもたちを育てることが課題である。夢や希望をもつためには、「生きる力」である次の3つの力を総合的に兼ね備えることが基本となる。

- ・生命を大切にして、自分自身がたくましく生きようとする生命力
- ・自分が心地よく、また、お互いに心地よく生活しようとする生活力
- ・自他の関わりの中で共によりよく向上しようとする成長力

これらの力は、相互に関係し合い具体的な場面の状況に応じて機能する力である。

人は生きていく中で、たくさんの人と出会い、様々な経験を通して生きがいを見つけ出す。自らが見つけた生きがいは生きる力となり、さらに、日々の生活を真剣に送ることで、自分自身で未来を拓いていく力につながっていく。(図1)のように、生きる力を根底にもち、未来を拓いていく子どもを育てる道徳教育を進めていきたいと考え、本主題を設定した。



(図1) 目指す子ども像

II 研究仮説とその視点

本研究では、次の仮説を設定し検証することとする。

1 研究仮説

『総合ユニット方式』の考え方を取り入れた総合単元的な道徳学習の一単元を構築し、子どもの意識の変容を追うことで、「生きる力を育み、未来を拓く」子どもの育ちをみることができる。

2 検証の視点

検証を進めるにあたり、次の3つの視点をおく。

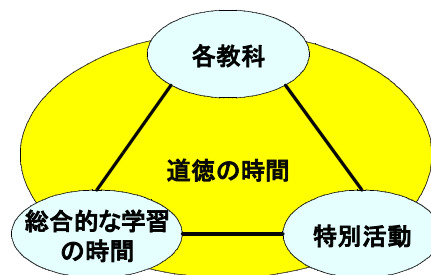
- 視点① 単元学習を進めるなかで子どもの反応をみると、単元を再構築する必要が生じてきた。子どもの意識や思考に沿った単元構築ができたか。
- 視点② 道徳の時間において、子どもの姿を見取り、意識を追究する方法は適切だったか。
- 視点③ 「生きる力」を感じることでできる子どもの姿が、単元学習のどのようところでどのような表現でみられたか。

Ⅲ 単元設定について

1 総合単元的に取り組むことについて

道徳の時間の目標は、「各教科、特別活動及び総合的な学習の時間における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を育成するものとする」と学習指導要領に示されている。道徳の時間と全教育課程で行われる道徳教育とが密接な関連を図ることが大切なのである。

このことから、道徳的価値を含む学習と道徳の時間の指導を関連させ、一つのまとまりとして単元を構成し指導する「総合単元的な道徳学習」が有効であると考え。そこで、本研究では、総合単元的な道徳学習を実践し、単元内での道徳的理解や体験を生かして道徳の時間の学習を深め、子どもたちの生きる力を育みたいと考える。



(図2) 総合単元的な道徳学習

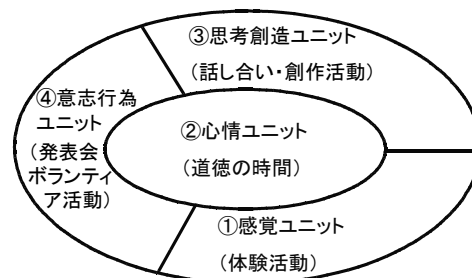
2 「総合ユニット方式」を取り入れることについて

「総合ユニット方式」とは【心情ユニット】の道徳の時間を核として、【感覚ユニット】【思考創造ユニット】【意志行為ユニット】の4つの場面（ユニット）を総合単元的に組んだ道徳学習のシステムを表したものである。この方式を用いることで、道徳的価値を意識した活動を子どもの思考や意識の流れに沿って構想することができる。知識だけの概念的理解のみに基づく学習では、子どもたちにとっては切実感が伴わず、「生きる力」としての道徳的実践力を高めることは難しい。しかし、子どもが体験活動を通して感じたことをもとに、道徳の時間に心情面を耕し、その上で、自分の思いや考えを深めた行為は、日常生活の中で生きて働く力となる。

(図3の①～④の学習過程)

さらに、人間として成長するために必要な社会体験や自然体験などを欠いた子どもが多い今日、それを補うためにも体験活動は重要である。

このような視点からみたとき、図3のように、体験活動に基づいた学習を展開していく「総合ユニット方式」の考え方を取り入れる意義は大きいと考える。



(図3) 総合ユニット方式について

Ⅳ 検証にあたって

1 単元について

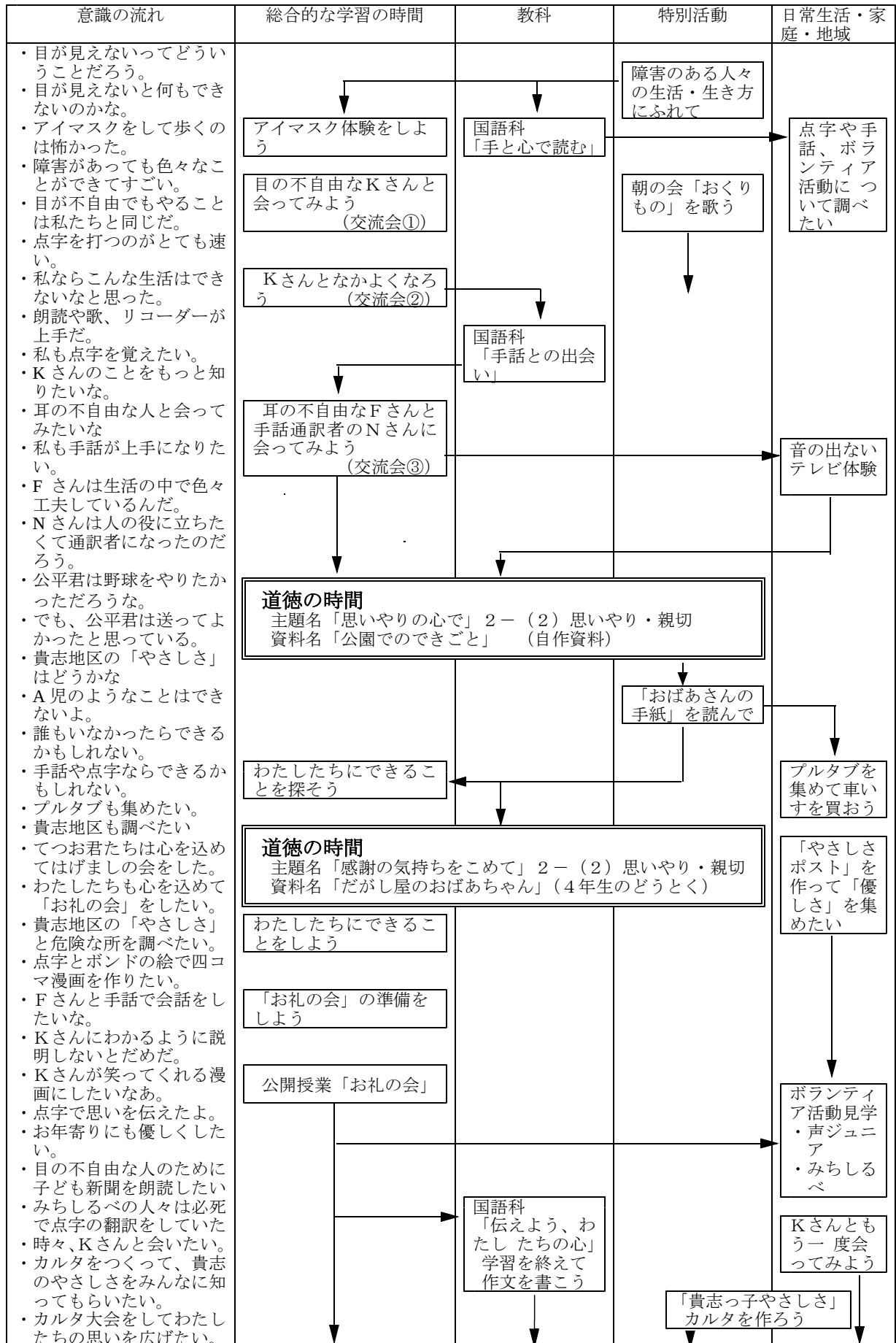
単元の概要としては、国語科の説明文を導入とし、目の不自由な人や耳の不自由な人と交流することを体験活動として展開した。さらに、単元の終末には、子どもたちが道徳の時間等で芽生えた新たな課題を自発的な実践に結びつけられるように、地域に根ざした実践の場を設けた。

(1) 単元名 「伝えよう、わたしたちの心」

(2) 単元のねらい

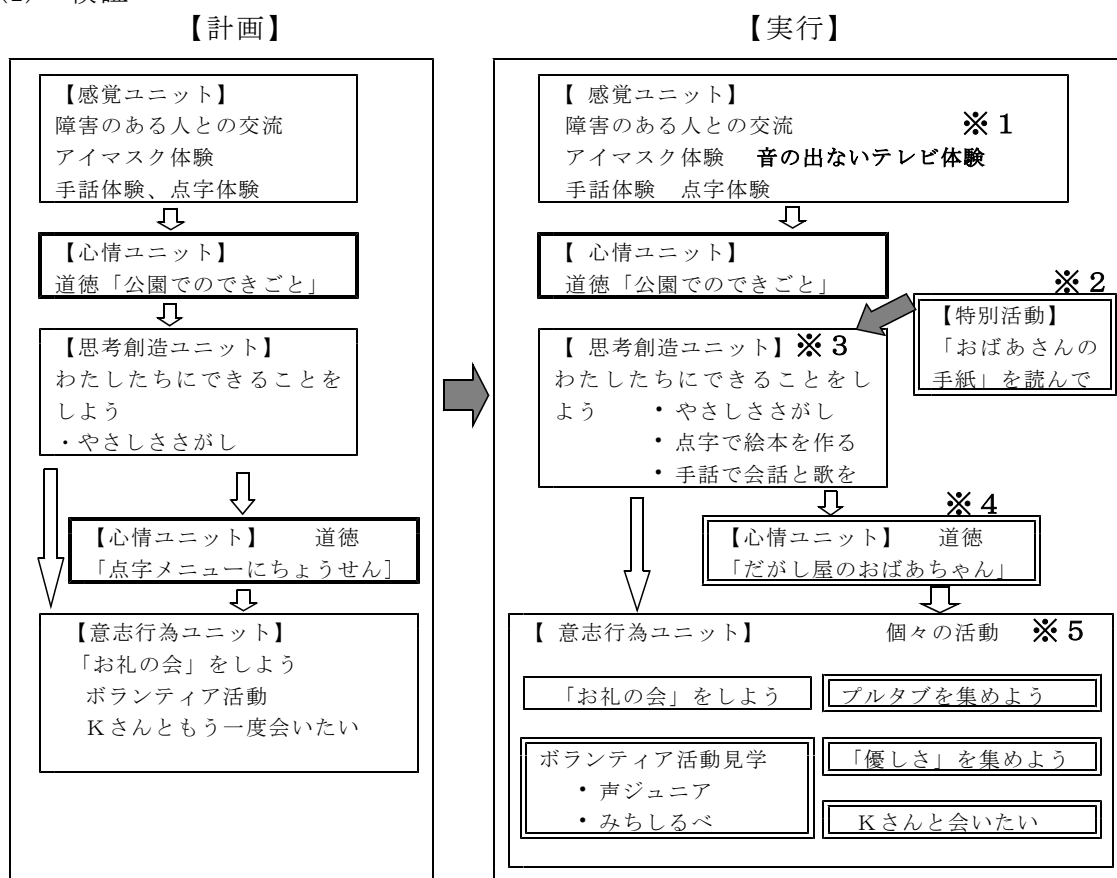
- ・障害のある人々と交流することで思いや願いを知る。
- ・誰に対しても思いやりの心をもって行動しようとする道徳的実践力を養う。
- ・貴志地区が障害のある人やお年寄りにとって「やさしい町」になっているかどうかを調べ、誰でも安心して生活できる町になるよう自分たちにできることを実践する。

(3) 総合単元図



2 視点①にかかわって

(1) 検証



指導計画は、学習を進めるなかで子どもの意識の流れを教師がしっかり見取りながら、柔軟につくり変えていく必要がある。どのような点をどのように変更したのか、その理由は何かについて述べてみたい。(※1～※5)

※1 【感覚ユニット】では、耳の不自由なFさんとの交流後、音の出ないテレビ体験をした。子どもたちは「電話が鳴っているのが聞こえない、TVは音なしの状態で見ることになる」などのFさんの思いを知り、「音が聞こえないとどんな感じだろう」「音が聞こえないFさんの思いがわかるかもしれない」という作文を書いた。その思いを大切にしたいと考えたからである。

※2 道徳の時間「公園のでできごと」の学習後に「おばあさんの手紙」を学習する特別活動の時間を設定した。学習内容を知ったA児の祖母から下記の手紙が届き、単元学習に組み入れたいと考えたからである。

「おばあさんの手紙」

私たちはラーメンが大好きでA児が家に来た時は、妹と三人で食べに行きます。ある日、店のテーブルで待っていると、白い杖を持ったおじさんが入ってきて、私たちの前のテーブルに座りました。すると、お店の人がお水を入れて来て、テーブルの真ん中に何も言わずに置きました。私は何か一言言えないのかなと思いました。その時、A児がさっと立ち上がったのです。A児はおじさんの所に行って、コップを持って左手でおじさんの手を持って「おじさん、お水ですよ。」と持たせてあげました。おじさんは喜んで、「おじょうちゃん、ありがとう、ありがとう。今日のラーメン、おいしかったわ。」と見えない目でこちらにお辞儀をして帰りました。A児は当たり前のことをしたように平気な顔をしていましたが、私は笑顔を作るのが精一杯で、心の中はA児を力一杯抱きしめてあげたかったです。

※3 【思考創造ユニット】では、全員が参加する貴志地区の「やさしさがし」の活動を計画していたが、「やさしさがし」「点字で絵本を作る」「手話で歌を歌う」の3つのグループに分かれて活動した。授業中の発言から子どもたちの活動意欲が感じ取れたからである。

※4 道徳の時間の資料「点字メニューにちょうせん」を「だがし屋のおばあちゃん」に変更した。

※5 【意志行為ユニット】では、「お礼の会をしよう」という全員参加の取組と並行して「プルタブを集めよう」「優しさを集めよう」「ボランティア活動を見学しよう」「Kさんと遊びたい」のグループ活動も取り入れた。それは、感想や体験記の中で子ども個々の実践への意欲が見られたからである。

(2) 考察

※1 「意味が分からなくて悲しくなってきた」「おもしろい番組なのに音なしだったら全然楽しくなく、聞こえない人の気持ちがよくわかった」の感想にあるように、音の出ないテレビを視聴することで、耳の不自由な人の思いに迫る第一歩となった。単元を通して、この思いをもち続けていければと思う。

※2 【特別活動】の「おばあさんの手紙」の時間を入れたことで、子どもたちは、身近に親切な行為をしたA児がいることに気づき、自分はどうかという観点で自己を見つめることができた。その感想には「知らない人には恥ずかしいから声をかけません。公平君がしたように、知っている人とは一緒にテレビを見たり、ラーメン屋で水を持って行ったりできます」「僕はA児みたいなことはできないと思うけど、公平君みたいな事ならできると思います」とある。A児に共感して自己を見つめるだけでなく、前時の道徳の時間の主人公である公平君に共感して自己を振り返ることもできた。

児童 29 人の個々の感想を分析すると、次の3つのことが言える。

ア 「A児のようなことができる」と書いた子どもは3人(10%)「したいと思う」も3人(10%)「できるかどうかわからない」は6人(21%)「できないと思う」は17人(59%)であった。

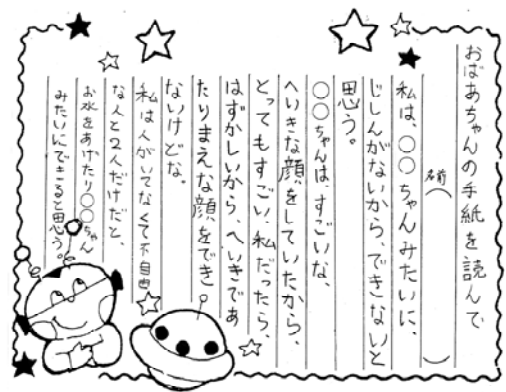
イ 「恥ずかしくてできない」「恥ずかしいかもしれない」など「恥ずかしい」という言葉を使っている子どもは14人(48%)いる。この14人を分析すると、「A児のようなことができる」「したいと思う」と書いた計6人は「恥ずかしい」という言葉は使っていない。「できるかどうかわからない」と書いた子どもの内3人と「できないと思う」と書いた子どもの内11人がこの言葉を使っている。

道徳的实践へと結びつけていくには、「恥ずかしい」という感情が壁になっているようである。この感情を子ども自身も周りの大人もどのようにコントロールしていくのが今後の課題であろう。

ウ 「中井さんのように知っている人にならできる」は3人、「人が見ていなくて二人だけだとできる」は2人いた。また、「野球のホームランなら教えてあげられる」「駅で電車が来たのなら教えてあげられる」「車いすなら押してあげられる」など、自分のできることをしていきたいという意識へもつながった。

※3 【思考創造ユニット】は子どもたちの思いを重視した3つのグループでの活動としたので意欲的に取り組めた。「次の活動は駅のやさしさを調べます。僕はスロープがあると思います。なぜならスロープがないと電車に乗れないからです」「手話の歌は覚えたから、今度はみんなと相談して私の持ってる手話のファイルを見て会話を覚えたいです」「四コマ漫画は目の不自由な人にわかってもらえるかなと思いつきながらやってみました。もっと点字を勉強してKさんに手紙も書きたいです」等子どもの思いで分かる。

※4 道徳の時間「だがし屋のおばあちゃん」を設定することで、誰に対しても思いやりの心をもって親切にしようとする道徳的態度を高めることをねらった。「おばあちゃんは話をするのが楽しいし、優しくしてくれたから、はげましとお礼の会



を開いた」「おばあちゃんに喜んでもらって自分もうれしかった」と子どもたちの発言にあるように、主人公に共感しながら親切にしようとする道徳的態도를高めることができたと思われる。

※5 子ども一人ひとりの自発的な活動を行ったことで、学校では表れにくい子どもの意識を追究することができた。「市和商デパートに行ったときスロープがたくさんあった。高校生が車いすの人を押していました。僕も自分の学校だったら押せるかな」という「やさしさ大発見カード」への記述が見られた。生活の場での実践に向かうエネルギーがどんどん溜まってきていると実感できた。実践へつなぐという面では、今後、地域の人々や家庭の協力、また、担任や友だちどうしの交流の場を設定して、一人ひとりの実践を追究することも必要であろう。

3 視点②にかかわって

(1) 検証授業指導案「道徳の時間」

- | | | |
|-------|-----------------------|-----------------|
| 1 日 時 | 平成 15 年 10 月 31 日 (金) | 第 3 校時 |
| 2 学 年 | 第 4 学年 1 組 (29 名) | |
| 3 主題名 | 思いやりの心で | 2 - (2) 思いやり・親切 |
| 4 資料名 | 「公園のでできごと」 (自作資料) | |
| 5 めあて | | |

おそろおそろきずあとをふいている中井さんの姿に心を動かされた公平君に共感し、進んで親切にしようとする態度を育むとともに、みんなにとっての「やさしい公園」について自分なりの思いをもつことができる。

6 本時の展開

学習活動	子どもの意識の流れ	教師の支援・願い
今までの活動を想起し、本時の学習のめあてを知る。		
1 今までの体験活動で心に残ったことを出し合う。	・アイマスクで歩いたら怖かった。 ・Kさんの思いを知って驚いたよ。 ・手話や点字の大切さがわかった。	・学習の足あとをたどる中で、本時の学習内容が確認できるようにする。
資料「公園のでできごと」を読み、話し合う。		
2 資料「公園のでできごと」を読み、感想を出し合う。	・野球をしたかったけど、中井さんについて行ってよかった。 ・中井さんに声をかけるとき、恥ずかしくなかったかな。	・自由に出させる中で、話し合いの方向づけができるようにする。
3 公平君の気持ちを中心に話し合う。 ○約束の時間より早く公園に着いた時	・早く野球をやりたいな。 ・中井さんがいるから気をつけよう。	・野球をやりたい公平君の心に共感できるよう発問を工夫する。
◎おそろおそろ傷をふいている中井さんの姿が目に入った時	・野球がしたいなあ ・声をかけようか、どうしよう ・恥ずかしいなあ ・やっぱり、声をかけよう。	・公平君の心の葛藤を話し合えるよう発問を工夫する。
○中井さんとふたりで歩いていた時	・中井さんにとって公園は不便なことがあるんだ。 ・貴志地区の公園はどうだろう。	・価値に迫る発言ができるよう、今までの活動を振り返るようにする。
今までの活動を振り返り、次の活動への意欲をもつ。		
4 今までの活動を振り返り、活動への意欲をもつ。	・目の不自由な人や耳の不自由な人ともう一度会ってみたいな。 ・貴志地区は誰でも安心して暮らせる町かなあ。 ・私たちにできることはないだろうか。	・新たな課題がもてるよう体験活動のビデオを視聴し、次時の活動へ意欲を高めさせたい。 ・貴志地区に目を向け、実践へつながる思いがもてるような終末にしたい。

公園でのできごと

ここは、貴志地区にある三角公園です。春には桜が咲き、お年寄りやベビーカーに赤やんを乗せたお母さんたちがお花見に来ます。六月には、公園の前の畑にあじさいの花が見事に咲き、くもったつゆ空にむらさき色、うす水色の花がとてもよく似合います。

この三角公園は、子どもたちが大好きな公園です。

四年生の公平君も一年生の時、このあじさい畑でかたつむりを取ってビンの中で育てたことがあります。秋には友だちとどんぐりを拾い、どんぐりごまを作って夕方おそくまで遊んだこともあり。冬だって、なわとびを持ってきて、白い息をはあはあとはきながら、仲のよいしんじ君やゆうた君と二重とびの競争をします。この公園は公平君もお気に入りです。

それに、何と言ってもこの三角公園は校区でただひとつのドッジボールができる広い公園です。今、学校は校舎建てかえのため、運動場がせまくなりドッジボールができません。だから、三角公園でドッジボールをするのがとても楽しみです。今日も、公平君は二組のしんじ君やゆうた君たちと遊ぶ約束をしました。昼休みにゆうた君が、「いつもの公園で一組対二組のドッジボールの試合をしようよ。公平君は二組の友だちを集めておいてよ。」と声をかけてくれた時は、「やったあ」と心の中でさけびました。五、六時間目の図工の時間もベツトボールでロケットを作りながら、ドッジボールのことばかり考えていました。

約束の時間より早く公園に着いた公平君は、一人でドッジボールのコートをかき始めました。クヌギの木のかげのベンチを見ると、一人の男の人がすわっています。男の人は手に白いつえを持っています。

公平君は、(中井さんだな。今日も来てるんだ。ドッジボールが始まったら、中井さんに気をつけなくて・・・)と思いました。

中井さんは公園の近くに住んでいます。前に遊びに来たときにも、何度か会ったことがあります。中井さんも、自然に囲まれたこの公園が好き

木々のおい、虫の声、鳥が羽ばたく音を聞き、それらをはだで感じるのが楽しみで時々この公園にやってきました。

今日も、キンモクセイのおいを体いつぱいに感じていました。ふと、そのあまいにおいにさそわれて立ち上がり、歩いていこうとしたその時です。中井さんは、石につまずいて転んでしまいました。

公平君は、「あつ。」と声をあげると同時に、中井さんのところかけより、体を支えながらいっしょにベンチにもどりました。

「大丈夫ですか。手当をしないと・・血が出ていますよ。」

と心配そうに言うと、「ありがとうございます。友だちの山野さんと来たのですが急用ができて家にもどったのです。もうすぐもどって来ると思うのですが・・・」と、血が出ているひじをさわりながら少し不安そうに言いました。

そのとき、ボールを持ったしんじ君やみんなの元気な声が聞こえてきました。

「公平君、待たせたね。さあ、ドッジボールをしようよ。」しんじ君がはずんだ声で言いました。公平君は、「うん。」と元気よく答え、今まさにボールを投げようとしたとき、ポケットからティッシュを出しおそろおそろきずあとをふいている中井さんの姿が目に入ってきました。

公平君は、ボールを持ったまうつむいていました。が、「しんじ君、悪いけどしばらくみんなでやってね。」と言うと、中井さんといっしょに家の方に歩き出しました。

二人で歩きながら、公平君は笑顔いっぱいの中井さんから、三角公園が好きなのを聞きまし

た。話がはずんでくると中井さんは、「入り口には階段があった公園に入りにくいこと」「点字ブロックの上に自転車置いてあることが多く、歩きにくいこと」など、話してくれ

ました。公平君は中井さんの白いつえを見ながら考えこんでしまいました。

(2) 検証と考察

ア 自作資料の活用で子どもの意識の持続を図る

体験活動での子どもたちの思いを見直したいと考え、体験活動と関連した内容の自作資料を活用した。授業後の感想にも、それまでの体験活動を想起したり、また、自分の生活を振り返ったりした内容が見られた。

野球をしようと言われて「やった」と心の中で叫ぶのは僕にも分かる。僕も野球が好きだから。学校の校舎建て替えて運動場が狭くなっているのは僕たちと同じ。公平君も野球がやりたかったと思う。

イ 中心場面の話し合いで子どもの意識を探る

「おそろおそろ傷をふいている中井さんの姿が目に入った時」の公平君の心の内を話し合うことで、公平君に共感して自己を振り返ることができる考えた。

T 公平君はじっと何か考えていたね。どんなことを考えていたのかな？

C 野球をしようか、中井さんを家まで連れて帰ろうかと迷っていた

C 野球よりお年寄りのほうが大事なかな？

C 1 野球をしていて友だちの山野さんが来るまで待ってて、それで来なかったら一緒に行こうかな？それとも、今すぐについて行ったらいいかな？

T 1 考えていたのはこんなことだけかな

C 久しぶりやから野球やろうかどうかどうしようかと迷っていた

C 1 は、公平君の葛藤する心の内を自分なりの言葉で発言することができた。しかし、他は「中井さんを送って行こうかと迷っている」という行動面を重視した発言が多かった。T 1 では、公平君の複雑な気持ちを引き出すような発問を工夫

する必要があった。

右の感想では、「かさな
ってすごく悩んでいた」「深
く考えている」のような言
葉に子どもの思いが感じら
れる。

このような子どもの思い
を話し合いの場で引き出す
ことができれば、個々の多
様な思いを集団の場で深め
ることができたと考える。
よい発問は子どもの心を揺
さぶり自己を見つめさせる
ことにつながると再確認した。

ウ B児を追って

【感覚ユニット】「目の不自由なKさんと会ってみよう 交流会①」の感想

僕たちは目で見ておいしく感じて食べておいしいと思うけど、目の見えない人は味だけで感じるのはいけそうだなと思いました。点字を速く書くのがすごいと思いました。名刺もくれました。僕は点字の名刺を見るのが初めてで感動しました。どうもありがとうございます。大事にします。◎今日はみょうにすらすら書けた（自己評価）◎もっと知りたいこと・点字の読み方



【心情ユニット】道徳の時間「公園のできごと」

発言 T 中井さんの傷をふいている姿を見て、公平君はどんな事を考えたのかな？
B児 久しぶりやから野球やろうかどうしようかと迷っていた。
感想 僕だったら中井さんにティッシュを渡して「待っていて」と言う。野球をしながら、時々中井さんを気にかける。公平君はふつうの子だと思う。中井さんのことを気にかけながら野球をするのも、中井さんを送って行くのも同じだと思う。



【意志行為ユニット】公開授業「お礼の会」 児童観察

3人グループで作った「やさしさ大発見新聞」をKさんに伝えた。始終にこやかで、穏やかな口調で発表した。説明の時はKさんの手を点字部分に優しく誘導したり、いすに案内したりできた。

道徳の時間後の感想「中井さんにティッシュを渡して『待っていて』と言う」「野球をしながら、時々・・・気にかける」には、野球をしたいという気持ちと、中井さんのことが気になるという揺れる気持ちが出ていて、B児はそれを子どもらしく表現している。また、「気にかけるながら野球をするのも、中井さんを送って行くのも同じだと思う」は、送って行っても行かなくても心情的には同じだとB児は捉えているのであろう。人は、目に見える行為（実践）を重要視しがちであるが、実践だけを評価するのではなく、このような子どもの思いに共感的理解をもって見取っていくことが必要である。B児には道徳的实践に向かつてエネルギーを持っている状態（道徳的实践力）が伺える。

困難に出会うと意欲がみられなくなるB児だが、単元の最初から興味をもって活動に参加していた。特に、【思考創造ユニット】や【意志行為ユニット】では、「熱心に活動する姿」や「友だちと協力する姿」「自分たちの思いをKさんに優しく伝えようとする姿」が見られた。



4 視点③にかかわって

(1) 検証

単元学習を通してC児の意識の流れを記録しながら、その中で主題に迫る姿をいくつか取り出してみる。(太字は考察するところ)

【感覚ユニット】

Kさんと出会う

・点字を打つのがとても速かったです。道路を歩く時は、車は音で分かるけど横断歩道は他の人たちと一緒に渡ると教えてくれました。**今度、道で困っている人を見かけたら声をかけようと思います。**困ったことは、目の見えない人のことをみんながあまり分かっていないことが悲しかったことです。昼休憩に点字を打たせてもらいました。読むときと反対に打つので難しかったです。

アイマスク体験をして

・アイマスクをするといつもの教室が違う所のようにとても怖くて、ジュースを入れる時もこぼれないかなとか、歩く時も前に何があるかわからないのでとても怖かったです。目の不自由な人はいつもこんななんだなと思いました。

〔課題〕

- ・点字を覚えたい
- ・家でどんなに料理をしているのかな

【心情ユニット】

道徳の時間「公園での出来事」では7回発言。

- ・主人公に共感して
 - 5、6時間目から楽しみにしていた野球をするか、目が見えなくて困っている中井さんを助けようかどっちにしようか迷っていた。
 - 自分はふつうで元気で目も不自由でないから今までそんなことを考えたことないけど、目の不自由な人は困ることがたくさんあるんだな。

【特別活動】「おばあさんの手紙」を読んで

- ・A児はラーメン店でおじさんにやったことが**当たり前だと思っているなんてすごく勇気がある**と思います。私はA児のような事はちょっと恥ずかしいからできないけど、駅で電車が来たのを教えるぐらいはできると思います。

【思考創造ユニット】点字&点字グループ(7人)で「4コマ漫画から目の不自由な人も読める紙芝居を作る。Kさんに点字で手紙を書く」などの活動をする。

下絵が完成したので、ボンドをつけて目の不自由な人にも楽しんでもらえるようにしたいと思います。ボンドをつけるときはでこぼこがはつきり出るようにしっかりつけると目の不自由な人にも**分かってもらえる**と思います。

ボンドをつけてかわかす時、少し斜めにゆがんでしまいました。目の不自由な人は、元の絵が見えないのでかわかす時もゆがまないように**気をつけないと伝わらないので、とても大変でした。**

【意志行為ユニット】・・・Kさんと呼んで「お礼の会」を開く。

お礼の会の前

Kさんによく**伝わる**ようにはっきりと分かりやすい速さで言います。

お礼の会の後

Kさんに4コマ漫画を見せたら、「すごいね。作るの大変だったでしょう」と言ってくれてうれしかったです。他のグループでは、「やさしさマップ」がKさんにとっても**伝わっていた**と思います。

〈ボランティア活動ー子ども声ジュニアを見学して〉

・子ども声ジュニアでは記事をそのまま読むのじゃなくて、見えない人にも分かりやすいように記事を少し変えて読んでいました。録音の本番を見たら真剣にしていました。それは、盲学校の人が、月に一回テープが届くのをとても楽しみにしているからと言ってました。私は、声ジュニアに入るのは**やめておこう**と思いました。それは、**もうちょっと文を上手に読めるようになってからにしよう**と思ったからです。

(2) 考察

C児は素直で、普段から実践意欲が感じられる発言が多い子どもである。

【感覚ユニット】では、「道で困っている人を見かけたら声をかけようと思います」「点字を覚えたい」と書いている。しかし、【意志行為ユニット】では、「声ジュニアに入るのはやめておこうと思う」と意欲がなくなったかのような記述があった。その理由として、「文を上手に読めるようになってからにしたい」とあり、それは、実践することの本当の意味をC児なりに



につかんだからだと考える。また、「A児が親切な行為をすることを当たり前と思っていること」を、C児は、勇気があると捉えていることに注目したい。

また、【思考創造ユニット】【意志行為ユニット】では、一貫して「伝える」「伝える」という言葉にこだわっている。「心が伝わることの大切さ」が単元を通してC児の発言や行動の中に見られた。

ここでは、一人の子どもの例を紹介したが、今回、多くの子どもたちの意識のつながりを見ることができた。総合単元的に取り組んだゆえの成果であると考えられる。

V 研究の成果と課題

「小学校学習指導要領解説 道徳編」第7章に、「教師は、児童の道徳性の実態を把握し、その結果を踏まえて指導の計画や方法を練る必要がある。指導の前後における児童の心の動きの変容などを様々な方法でとらえ、それによって自らの指導を評価するとともに、指導方法などの改善に努めることが大切である」と述べられている。総合ユニット方式の考え方を取り入れて単元を計画し、子どもの思いに共感的理解を示しながら学習を進めたことで多くの発見があった。

まず、単元最後の作文では、「障害のある人だけでなく、お年寄りにも親切にしたい。プルタブを集めて車いすを送りたい。ボランティア活動をしたい」など、人の役に立ちたいという思いの子どもが11人(38%)、Kさんのことを書いたのが4人(14%)で、そのうちの1人が「Kさんがうらやましくなってきた。それを伝えるとKさんはうれしそうでした」と書いていた。単元学習を進める中で、子どもたちの意識が、障害のある人やお年寄りのこと、ボランティア活動のことなどに向いてきたと考えられる。

次に、貴志地区の「やさしささがし」では、貴志地区の人々と接することができた。「お礼の会」は公開授業として保護者にも参加していただいた。このように、子どもたちにとって学びの対象や教材が身近にあることは、今後、地域社会との積極的な交流につながっていく可能性につながるものと考えられる。

また、本単元では、内容項目「思いやり・親切」をめあてとしたが、さらに、道徳の時間では1-(4)「勇気」について、【思考創造ユニット】では2-(3)「友情」についてなど付随する価値にも迫っていくことができた。

課題としては、本研究では、授業での子どもの様子、発言、授業後の作文、成果物を分析することで子どもの姿をみてきたが、十分捉えきれたとは言えない。児童の反応や変容に気づく多様な方法を用い、よりよい評価につなげていくことが必要である。

子どもの道徳性の育みを追究すると、一人ひとりの子どもの思いを活動につなげられる場が大切であることがわかる。今後、子ども一人ひとりの道徳的実践力の高まりを、家庭、地域の協力を得ながら日常生活の中で道徳的実践につなげていくことを課題としてさらに取り組んでいきたい。

〈主な参考文献〉

- | | | | |
|-------|-------------------|--------|--------|
| ・新堀通也 | 『「生きる力」の探求』 | 小学館 | (1997) |
| ・文部省 | 『小学校学習指導要領解説 道徳編』 | 大蔵省印刷局 | (1999) |
| ・押谷由夫 | 『総合ユニット方式による道徳学習』 | 東洋館出版社 | (2000) |